

## 報告

# アカデミック・ライティング・チュートリアル

— 立命館大学国際関係学部取り組み —

FRENCH Thomas W.・KUNSCHAK Claudia  
O'MOCHAIN Robert・RAJKAI Zsombor Tibor

新 野 豊

## 要 旨

立命館大学国際関係学部は、2016年よりライティング・チュートリアル・プログラムを実施し、大学図書館におけるチュートリアルを通じて、学生がアカデミックライティング能力を向上させ、自立した書き手となることができるよう、支援を行ってきた。本報告では、ライティング・チュートリアル・プログラムの立ち上げや運営を実践した見地から、英語によるプログラムを中心にその取り組みの経緯と概要、成果を、米国や日本でのライティング・センター等の現状とともにまとめ、課題や立命館大学における今後のあり方について明らかにすることを試みる。

## キーワード

ライティング・チュートリアル、ライティング・センター、学習支援、ピア・ラーニング、自立した書き手、教職協働

## 1 はじめに：ライティング・チュートリアルの成り立ち

立命館大学国際関係学部は、2016年より英語による「ライティング・チュートリアル・プログラム」を開設した。プログラムでは、学生がアカデミックライティング能力を向上させ、自立した書き手となることができるよう、院生・学生チューターの対話による学生への個別指導を行った。本稿では、これらの取り組みの課題や立命館大学における今後のあり方について明らかにすることを目的に、ライティング・チュートリアルの成り立ち、日本での展開、立命館大学国際関係学部におけるプログラムの内容について報告する。

「ライティング・チュートリアル」は、文章作成における個別指導をさすが、米国の高等教育機関においては、ライティング・センターのような「教室外で書き手に個別指導を行う機関」において古くから行われてきた（ボイド 2013:242）。「チュートリアル」は、ライティングに限らず個別や少人数指導全般について用いられるが、日本の高等教育や大学教育に関する文脈では、オックスフォード大学をはじめとした、英国やオーストラリアの大学などで実施されている指導

方法としても、荻谷（2012）、荻谷・石澤（2019）、竹腰（2017）などによって紹介されている。これらのチュートリアルと上記の「ライティング・チュートリアル」とは「対話を中心にする」といった様々な通底する点があるが、本稿では専らボイドの紹介するような、教室外で書き手に対して行われる個別指導について報告する（荻谷・石澤 2019:18-19, 283）。

太田・佐渡島（2012:239）によれば、ライティング・センターは、「1950 年代にアメリカで発足し、1980 年代に全米に広まった。現在は、アメリカのほぼすべての大学に設置されて」いる。米国の大学では、（学力の面で）多様化した学生に対する様々な学習支援の一つとして、数学センターや ESL（English as a Second Language）センター等などの学習（支援）センター（Learning（Assistance）Center）とともに取り入れられている（壁谷 2017:113）。

ただし、ライティング・センターは、多様化した学生に対するリメディアルとしての学習支援のみにとどまるものではない。North は、文章を預けて「クリーンアップ」してもらう場所であるとか、問題の多い論文や、問題を抱えた学生のための施設であるといった、ライティング・センターについて持たれがちな様々な認識を紹介しながら、ライティング・センターにおける重要な目標は「よりよい文章を作るのではなく、よりよい書き手を作る」ことだとしている（North 1984:438、太田・佐渡島 2012:238）。

佐渡島（2013:4-9）は、ライティング・センターを支える理念として、米国における 1980 年代の Writing as a Process 運動や Writing Across the Curriculum の影響を説明しながら、「ライティングを過程において指導する」、（学問的な）「領域を横断して指導する」、「紙を直す」のではなく、「書き手を育てる」の、3 点をあげており、この考え方は、広く実践や研究が蓄積されている米国<sup>1)</sup>だけでなく、後述する日本のライティング・センターにもひろく受け入れられている<sup>2)</sup>。

## 2 日本でのライティング・センターやチュートリアルの展開

日本では、2004 年に設立された早稲田大学ライティング・センターが先駆的な事例として知られている。同センターは国際教養学部内に、同学部生のみを対象に開設されたが、2008 年からは大学全体の運営となり、全学の学部生、大学院生および教員を対象に開放された（太田・佐渡島 2012:247）。現在では、アカデミック・ライティング教育部門に所属する教員 4 名、助手／助教 9 名のもと約 30 名の大学院生チューターが支援を行っている<sup>3)</sup>（早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム）。

2010 年の段階で、吉田ほか（2010:105）は、早稲田大学や東京大学、上智大学、大阪女学院大学等の事例を紹介しながら「大学ライティングセンターは日本ではまだ黎明期にあるが、少しずつしかし確実に大学の一部機関として認識され始めている」と分析したが、小林・中竹（2020:6）は、「学生に対する新たな教育的実践として、正課授業内外でライティング教育ならびに支援を提供していこうという動き」の「象徴的な動向」として 2010 年代に入ってライティング・センターの新設が相次いでいることを紹介している。表 1 に、ウェブサイト等でライティング・センターやデスク、ラボ等の活動について発信している大学のうち一部を紹介した。

太田と佐渡島（2012:239）は、日本の大学のライティング・センターの、「外国語としての英語」「母語としての日本語」や「留学生を対象として第二言語としての日本語」など、欧米の大学と

は異なる対象を支援する特殊性について言及しているが、表1に示した事例でも、対象とする言語にくわえて、位置付けや特色にも多様性がある。例えば、国際基督教大学はスーパーグローバル大学創生支援事業（SGU）の取り組みの中でライティング支援を紹介している（国際基督教大学）。津田塾大学と関西大学は、大学間連携共同教育推進事業に採択されて、2012年から5年間「ライティングセンターを核にした効果的かつ総合的なライティング／キャリア支援の構築を通して、これからの社会に必要な〈考え、表現し、発信する力〉の育成を実現」する取り組みを連携して実施した（関西大学・津田塾大学）。追手門学院大学では、設立の狙いの一つに「日本語の文章作成を通じて、文部科学省が示した「学力の三要素」を養成すること」が掲げられている（梅村 2019:19）。早稲田大学では、初年次生向けの正課授業を同じ部門の中で大規模に実施しているし、広島大学ライティングセンターは、2017年より、アドバイザーの指導のもと、参加者が相互に議論したりフィードバックを行うことで、英語論文執筆を支援する「ライティンググループ」の形成も行っている（早稲田大学 アカデミック・ライティング・プログラム、広島大学）。会場についても、図書館などに併設されたラーニング・コモンズなどでサポートが実施されることもあれば、独自にセンターとしての施設を持って展開している場合もある<sup>4)</sup>。このように、日本の大学では、基本的な理念を共有しつつ、支援する言語や会場など、それぞれの大学やセンターの理念や実情にあわせて、多様な形態でライティング・センターやチュートリアル・プログラムが展開されている<sup>5)</sup>。

表1 日本国内の大学ライティング・センターの例

大学 センター名	主たるサポート言語	主たる時間設定	主なチューター	会場や設置形態
青山学院大学 アカデミックライティングセンター	英語／日本語	45分	大学院生	図書館内およびその近くに設置（キャンパスによる）
追手門学院大学ライティングセンター	日本語	40分	学部生、教員	各キャンパスにセンターとして設置
関西大学ライティングラボ	日本語	40分	大学院生	図書館、学生センターなどキャンパスにより異なる。
国際基督教大学 ライティングサポートデスク*	英語／日本語	40分	大学院生	図書館内に設置された学修・教育センター内に設置
上智大学 ライティングチューター制度*	英語／日本語	60分	大学院生	Language Learning Commonsの中に設置
津田塾大学ライティングセンター	英語／日本語	45分	教員	相談室として独自スペースあり
広島大学ライティングセンター*	英語／日本語	40分	大学院生（ライティング相談）	図書館の中に設置
立命館アジア太平洋大学 ライティングセンター*	英語／日本語	40分間	学部生	図書館内に設置
早稲田大学ライティング・センター*	英語／日本語	45分間	大学院生	独自のセンター施設、各キャンパス分室はラーニングコモンズなどにも配置

各大学ウェブサイトおよび注5)で紹介する各論考等から作成。時間やチューター等は様々な実施形態で行われているため、主なもののみ紹介した。

\*印はSGU校

### 3 立命館大学国際関係学部でのライティング・チュートリアル展開

#### 3.1 立命館大学におけるライティング・サポート

立命館大学では、個別の学部やプログラムによって、様々なライティング教育や支援が展開されている。2012 年度から衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパスの図書館内のラーニング・コモンズ「びあら」内に、日本語での「アカデミック・ライティングに関する相談窓口として、いずれはライティング・センターを設置するという構想のもとでデスクが設置されることとなった」。デスクの設置にあたっては、立命館大学教育開発推進機構の教員及び教育開発支援課の職員が中心的な役割を果たし、学部横断型で開講される「特殊講義：日本語の技法」と連動して大学院生や研究生によるサポートが行われたが、運営主体などの変更などもあり、2015 年度には一時的に閉鎖されている（中島・鹿島 2016:104, 107, 112）。

また、英語でのライティング・サポートは、2018 年に各キャンパスに開設された Beyond Borders Plaza（以下 BBP）<sup>6)</sup> の自律学習サポートデスクにおいて「BBP ファシリテーターの教員が一般的な英語ライティング（Writing）、英語全般（General）に関する相談に対応」しているが、1セッションの対応時間は 15 分間で、ライティングのサポートについては、2020 年の 7 月を例にあげれば、週 4 セッションの開催で「授業の課題についての相談は授業の担当教員に」することが求められているなど、現状では、サポートの範囲は限られている（Ritsumeikan Beyond Borders Plaza）。大学院生向けには、大学院キャリアパス支援プログラムが「英語論文個別指導 & プルーフリーディングセッションズ」が期間を限定して実施されているが、対象は大学院生に限られていて、内容も「文法や語彙の弱点、自身での校正方法等」など、これまで紹介してきたライティング・センターの考え方などとはやや異なっている（立命館大学大学院キャリアパス推進室）。

2019 年の 8 月には、立命館大学教育・学修支援センターによって教学実践フォーラム「「論理的思考力・探究力」を育てるアカデミック・ライティング—言語の枠を超えた「書く」指導のあり方—」が開催され、国際関係学部からも英語部会を代表してプログラムを担当していた O'Mochain 准教授が事例報告を行い、全学レベルでのライティング・センターの必要性を提起するなど、全学的に実践の共有が開始されているが、現状では、上述の早稲田大学などで実施されているような規模での大学全体でのライティング・サポートのデスクやセンターについては、日本語、英語とも開設されていない（立命館大学教育開発推進機構 2019）。

#### 3.2 国際関係学部におけるライティング・チュートリアル開始<sup>7)</sup>

立命館大学国際関係学部<sup>8)</sup>では、2011 年度に英語で学ぶ学士学位課程であるグローバル・スタディーズ（以下 GS）専攻が開設されたのち、英語を母語としない学生を含む学部生に対してのライティング支援や剽窃防止の必要性から、1 回生科目である Academic English<sup>9)</sup> や Introductory Seminar などで丁寧な指導が行われるほか、学部生を対象に公開されている IRNavi の中にも「Guidelines on Writing Essays and avoiding Plagiarism」が掲載されるなど、ライティングに関する支援が継続して行われてきた（立命館大学国際関係学部 b, 立命館大学国際関係学部英語部会 2020）。

また、2018年度以降の入学者を対象とした学部カリキュラム改革では、卒業研究の必修化<sup>10)</sup>とともにGS専攻、国際関係学専攻の学生に対する英語運用能力（ライティング能力を含む）の強化を支援することが検討されており、同時に設置が計画されていたアメリカン大学とのジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）においても、ライティング・センターや、アカデミック・アドバイジング等、米国の大学と同様の学習支援環境を整備することの必要性も議論された<sup>11)</sup>。

このような状況の中、国際関係学部では、剽窃防止教育のオンラインサービスである Turnitin を併用しながら、ライティングの個別指導（チュートリアル）を試行的に実施することを計画した。2016年度は、学部としての独自の予算措置と、立命館大学図書館の予算補助を受けて、ライティング・チュートリアルについても小規模なレベルから実施することとなった。実施対象は主としてGS専攻の1回生が受講する Introductory Seminar（立命館大学の他専攻、学部では基礎演習に相当）と Academic English を想定し、運営にあたっては、英語教員による部会と、Introductory Seminar の世話人（教員）が協力して担当することとして、チューターの募集や研修会の実施ののち、2016年6月に英語でのライティング・チュートリアル・プログラムが開始された。その後、2017年度は、大学から教育力強化予算が配分され、2018年度からは、立命館学園の中期計画である R2020 後半期計画の実現のために整備した R2020 後半期重点政策推進予算（学部教学高度化予算）の支援対象となり、予約管理等を担当する非常勤職員の配置が可能となったほか、実施規模は英語に比べると小さいものの、日本語でのチュートリアル・プログラムも発足した。

## 4 国際関係学部におけるライティング・チュートリアルの方法、実施体制<sup>7)</sup>

### 4.1 ライティング・チュートリアル・プログラムの概要（時間と会場）

ライティング・チュートリアルは図1のような流れで実施される。上述のとおり、開設当初ライティング・チュートリアルは Turnitin を利用（セルフチェック済みのレポートを持参する形式）し<sup>12)</sup>、指定された曜日の5時限目（16時20分～17時50分）の間に1セッション30分で実施した<sup>13)</sup>。予約の受付は、アサイメント（課題）の提出時期に合わせて各クラス内で実施した。利用にあたって利用者が利用料や手数料等を負担することはない。

試行的な実施の結果、時間が短いという指摘をうけ、2016年度後期セメスターからは1セッション45分間に延長したほか、2017年度以降は Turnitin の利用を前提にしないチュートリアルを行うこととし、予約も事務室内のカウンターで受け付けられるようにした。

ライティング・チュートリアル・プログラムの会場は、2016年度から本報告を執筆した2020年8月までの間、新型コロナウイルス感染拡大防止のためにオンラインで実施した2020年度春セメスターをのぞいて、平井嘉一郎記念図書館<sup>14)</sup>のラーニング・コモンズ、ぴあらの学習スペースにおいて実施されている。このスペースは、通常は、利用者が個別または共同して学習するために設置されているが、チュートリアルの実施時間帯になると、ポールでゾーニングされ、看板が設置されて、チュートリアルスペースとして利用される。

平井嘉一郎記念図書館はキャンパスの北東部に位置し、最も西側に基本棟を置く国際関係学部



からはアクセスが良いとは言えないが、発足当初、図書館の学習支援の文脈で予算上の支援を受けたことだけでなく、論文等の執筆時の図書館のリファレンスや資料へのアクセス、授業の予習・復習や課題への対応といった授業時間外学習の際の活用など、国際関係学部生の図書館利用への接続に関する期待から、継続して「びあら」が活用された。これらの教育的な目的に加えて、兼務で担当する国際関係学部教職員が常時チュートリアル会場に待機できないこともあり、チューターが図書館のカウンターから目の届くオープンなスペースでチュートリアルを実施できることや、図書館ではチューター以外に多くの学生スタッフ<sup>15)</sup>が活躍していて、その労務管理を行うために控え室やタイムカード打刻機などを有していることなどの運営上の利点があったこと、将来はこのようなライティング・サポートが大学全体の取り組みとして図書館で展開する可能性への期待なども考慮された<sup>16)</sup>。

- 1) ウェブサイトや、授業内でチュートリアル・プログラムが学生（利用者）に紹介される（授業によっては強く推奨される）。
- 2) チュートリアル実施可能な日程がオンライン予約フォームに掲出される。
- 3) 学生はオンラインフォームで予約する（当初は授業内や事務室台帳で予約）。
- 4) 学生はプリントアウトしたペーパーを会場に持参する。
- 5) 45 分間（開設当初は 30 分間）チュートリアルを行う。  
冒頭で、学生が課題の内容や困っている所などについて説明し、チューターとの対話を通じて、取り組む内容を共有する。  
共有された課題にそって、チュートリアルを実施する。文法や文章をなおすのではなく、学生が自立した書き手となることができるよう、対話を通じたサジェスションを行う（文法等の誤りが繰り返される場合は、その後利用者自身が確認、解決ができるような指摘を行う）。  
\*英語のチュートリアルは英語で、日本語のチュートリアルは日本語で行われる。
- 6) 学生・チューター相互がアンケート／レポートを作成し、大学側（図書館カウンターで受取）に提出する。

図 1 ライティング・チュートリアル・プログラム利用の流れ



図 2 ライティング・チュートリアル・プログラムの様子

## 4.2 チューターの採用と研修

チュートリアルは、大学院生、学部生のチューターが学生を1対1で担当することとし、採用や研修にあたっては、英語部会の教員、Introductory Seminar 世話人、チュートリアルを活用する授業担当者と、国際関係学部事務室が協力して、選考やトレーニングを行った。採用にあたっては、応募者がこれまで執筆したレポートや経験等を参考にして選考が行われ、研修では、各授業で期待されている対応が共有されたり、ロールプレイングを通じてチュートリアルスキルの向上がはかられたほか、ハラスメント等のトラブルを避けることや労務上の手続きや報告等についてのガイダンスが行われた。この研修は、毎セメスター継続して実施されており、チューター経験者も参加することとなっている。研修は図3、4のように実施される。ロールプレイでは、サンプルエッセイをもとに、チューター同士（未経験のチューターには経験のあるチューターが相手役をつとめる）でチュートリアルを実施したのちに感想を共有したり、教員がブルーフリーディングを要望する学生役になり、それに対してチューターが本来の趣旨について説明したうえで「自立した書き手」となることができるよう促す、といった、起こりうるケースを想定したやりとりも行われた。

プログラムのウェブサイトで強調されているとおり、プログラムは大学院生、学部生によって担われる、学生同士のピア・ラーニングの側面を持っている。立命館大学は、学園ビジョンR2020においても、「学習者中心のコミュニティ」がキーワードとなっているとおり、伝統的に学生間のピアサポートが様々な形で行われるなど「学びの共同体」が重視されてきた（立命館 a、沖 2016）。勤務内容の検討や契約の方法、研修等も、大学がそれまでに運用してきたティーチング・アシスタント（授業や教学活動をサポートする大学院学生）や、エデュケーショナル・サポーター（正課科目において学部生が学生を支援する制度）の制度を参考にしながら検討された<sup>17)</sup>。チューターからは「たくさんのリサーチや執筆に関心があるが、どのようにしたらいいかはわかっていない初年次生に対してセッションを行いました。彼らに、新しい世界を紹介することに変えてやりがいを感じました」、「チューターを務めることが私自身のクリティカルシンキングスキルを高めていると感じる」といった声も寄せられており、サポートする側にとっても、成長する機会になっている（Ritsumeikan University College of International Relations）。

英語でのライティング・チューターは、過去の執筆論文やレポートなどを参考に選考された国際学生（英語を母語とする場合とそうでない場合を含む。また、海外の大学でチューター経験を持ったものも参加した）や長期留学経験のある国内学生が担当した。通常の授業サポートにおいては、日本語の能力を問われることも多いが、英語でのライティング・チュートリアルは英語のみを利用して行われることから、ライティング・チュートリアル・プログラムは、日本語の能力が十分でない大学院生や学部生にとってもピア・ラーニングや就労の機会となった。



図3 チューター研修（ロールプレイ）の様子

- 1) 事務局による雇用手続きについての説明
- 2) チューターとしての倫理的な要件（個人情報の保護や、ハラスメントの防止、チュートリアル時間外での個別指導の禁止など）についての説明。
- 3) 担当教員からのガイダンス（テキストや、海外の大学のライティング・センターが公開しているビデオなども参考に利用）
- 4) チュートリアルを多く利用する授業の教員が参加して、授業の獲得目標、ルーブリックや学生実態、チュートリアルへの期待について説明する。
- 5) ロールプレイ（チューター同士で学生役とチューター役を交代して行ったり教員が学生役をつとめたりして、実際にチュートリアルを実施する。

図4 チューター研修の内容

#### 4.3 利用実態・評価と利用の促進

表2に示されるように、ライティング・チュートリアル・プログラムは各授業の進行や方針と連携しながら一定数の利用が行われた。実施初年度である2016年度の利用者アンケートでは、チューターが次にどのようなステップを示せたか、ミクロスキル、マクロスキルについて支援したか、といった質問に9割を超える利用者が肯定的に回答している。プログラム担当者であり、本稿執筆者の一人でもあるKunschak教授は、本プログラムの実施初年度（2016年度）の取り組みについて、剽窃防止ソフトウェアの利用の観点も含めて成果をまとめており、学生がライティングを改善するために効果的であったと感じているか、またライティング・チュートリアルサービスを継続して利用したいかという点で、学生から高い評価を受けていることを報告している（Kunschak 2018:64）。



表2 利用者数とチューター数の推移

	春semester	秋semester	主な利用クラス
2016年度	36(3/0)	147(5/2)	Introductory Seminar, Academic English, 英語等
2017年度	192(4/4)	286(3/5)	Introductory Seminar, Academic English, 英語等
2018年度（新カリキュラム開始）	252(3/5)	129(6/4)	Introductory Seminar, Academic Skills, English for International Studies 等
2019年度	178(8/3)	93(6/2)	Introductory Seminar, Academic Skills, English for International Studies, Advanced Seminar等

\* 春・秋semesterの利用者数は2017年度までは予約数を記載している。カッコ内はチューター数（大学院生／学部生）

プログラムウェブサイトや報告書によると、2017年度秋semesterも90%を超える学生が、2018年度春semesterではプログラムを利用した学生のほとんど（97%）が利用の成果を高く評価した。また、同年度秋semesterの利用者アンケート（回答数108、回収率83.7%）で、リサーチクエストの立て方、構成、文法、表現方法、引用方法等に関わりチューターから受けた指導について100%が「大変役立った」「役立った」と回答し、「ライティング能力の向上に役立つサポートが受けられたか?」「チュートリアルをまた利用するか?」という問いに対しても100%が「Yes」を選択したことが報告されている。同様のアンケートは2019年度春semesterも同様に実施され（回答数165、回収率92.7%）、ほぼ99%が肯定的に回答している（Ritsumeikan University College of International Relations）。図5のとおり、自由コメントからは、学生自身が「自立した書き手」になるためのサポートが行われていることがわかる反面、文法のみの特化した指導に感じた、という指摘もあった。チューター向け事後アンケートやチューター・ミーティング等では、利用者から手取り足取り答えを教えてもらうよう期待されることもある、というコメントも寄せられている。引き続き「自立した書き手」を育てるチュートリアルのあり方について、検討や改善が必要である。

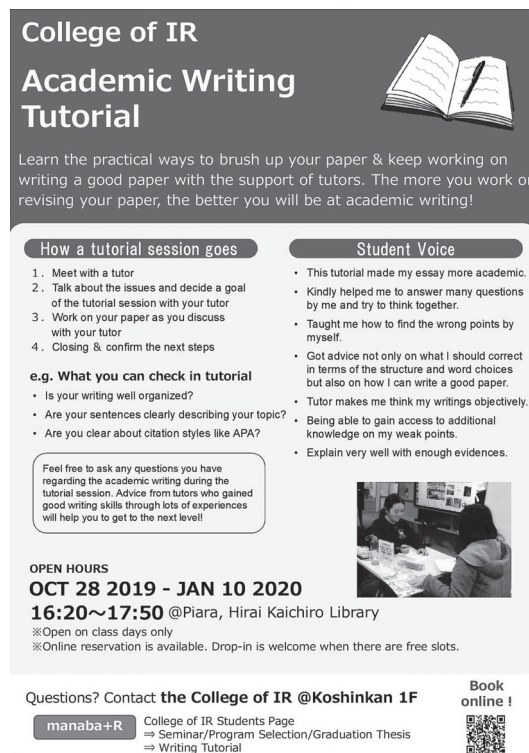
- ・（チューターは）親身になって私のたくさんの質問に答えてくれ、一緒に考えようとしてくれた。
- ・わたし自身が問題点を見つける方法を教えてくれた。
- ・エビデンス（根拠）を示しながら教えてくれた。
- ・文法だけでなく、内容にも関心を示してほしい。

図5 利用者のコメントの抜粋

また、GS専攻やJDPの学生には、英国や米国などの出身者や英語による中等教育を受けたものも多く含まれているが、日本語や英語など、いずれの言語を母語とするかにかかわらず、アカ

デミック・ライティング能力を育てる観点から、すべての学生に対して、チュートリアルの利用を促している。また、主として日本語で学ぶ国際関係学専攻の所属学生（English for International Studies の受講者）も、英語圏の大学への交換留学や GS 専攻の科目の受講準備のため、高いレベルのライティング・スキルの習得を目指して利用するなど、利用者の属性や英語運用能力は多様である（立命館 b）。

プログラムの発足当初は、各クラスの中で、学生に義務的な参加を促し、割り当てた予約枠数は適切に利用されたが、チュートリアル可能枠数の拡大、増加や、案内を積極的な参加推奨に変更したことで、チューターが待機しても利用者がいない時間帯も発生するようになった。後述するように、オンラインでの予約が可能になるよう工夫したり、図 6 のような学生向けのチラシの掲出、配布や教員への案内をしたり、特に対象として意識していた新入生については、入学直後に実施されるライブラリーツアーにおいて、チューターやスタッフが実際のチュートリアルの会場でプログラムの魅力について紹介するなどして、利用の促進に努めている。



**College of IR**  
**Academic Writing Tutorial**

Learn the practical ways to brush up your paper & keep working on writing a good paper with the support of tutors. The more you work on revising your paper, the better you will be at academic writing!

**How a tutorial session goes**

1. Meet with a tutor
2. Talk about the issues and decide a goal of the tutorial session with your tutor
3. Work on your paper as you discuss with your tutor
4. Closing & confirm the next steps

**e.g. What you can check in tutorial**

- Is your writing well organized?
- Are your sentences clearly describing your topic?
- Are you clear about citation styles like APA?

Feel free to ask any questions you have regarding the academic writing during the tutorial session. Advice from tutors who gained good writing skills through lots of experiences will help you to get to the next level!

**Student Voice**

- This tutorial made my essay more academic.
- Kindly helped me to answer many questions by me and try to think together.
- Taught me how to find the wrong points by myself.
- Got advice not only on what I should correct in terms of the structure and word choices but also on how I can write a good paper.
- Tutor makes me think my writings objectively.
- Being able to gain access to additional knowledge on my weak points.
- Explain very well with enough evidences.

**OPEN HOURS**  
**OCT 28 2019 - JAN 10 2020**  
**16:20~17:50** @Piara, Hirai Kaichiro Library  
※Open on class days only  
※Online reservation is available. Drop-in is welcome when there are free slots.

Questions? Contact **the College of IR @Koshinkan 1F**

**manaba+R** College of IR Students Page  
⇒ Seminar/Program Selection/Graduation Thesis  
⇒ Writing Tutorial

**Book online!**

図 6 ライティング・チュートリアル・プログラムのチラシ

#### 4.4 運営のながれと体制

上述のとおり、発足以来、英語教育を担当する教員と GS 専攻において Introductory Seminar の世話人を務める教員とが連携して、運営に関する企画や、チューターの研修等を実施してきた。研修の実施や運営の検討にあたっては、学部直接所属していない嘱託講師も含むチュートリアルを利用する授業の担当者が参加して、それぞれの知見をもちよりながら、プログラムの運営が

行われた。国際関係学部事務室からは、発足当初から職員が他の業務との兼務で参画し、企画、広報や、他部門との調整、予約管理、給与支払いを担当したり、図書館スタッフからの協力を得ながら、報告書類の収集、チューターの労務管理など、様々なサポートを行った。これらの教職員は、皆、英国や米国等、海外の大学での就学、教育、研究や、国際学生を含む GS 学生への英語での指導や支援の経験を有していた。そのため、ライティング・センターやサポートの重要性や運営の具体的なイメージをある程度理解しており、立命館大学においてもこのようなサポートが必要であることについても課題認識を共有していた。

#### 4.5 運営の改善と現在

2018 年度からは、上述のとおり大学の重点枠としての予算が確保され、非常勤の職員が業務を補助できることとなり、プログラムの規模が拡大された。また、2019 年度からは、それまで各授業内や国際関係学部事務室のカウンターで台帳に記入する形で行われていた予約が、オンラインで行われることとなった。オンラインでの予約は、学生にとっての手軽さを増し、事務運用を容易にすることができた一方、直前のキャンセルも増加するなど、適切なシステム設計なども課題となっている。

また、担当職員が学外で実施された FD 研修会に参加し、早稲田大学ライティング・センターの運営や考え方について学んだことなどから<sup>18)</sup>、2019 年度からは、学生向けウェブサイト等で「自立した書き手」を養成するサポートであることを強調し、いわゆる文章校正（プルーフリーディング）は行わないことを含めた「What we do, What we do NOT do」を明記して、プログラムのミッションをチューターや学生が明確に理解できるよう、工夫を行った（図 7）。

さらに、早稲田大学において行われているチューター研修にならって、チューター自身の成長や専門性の獲得やチューター相互の学び合いを支援できるよう、事前研修に加えて 2 週間に 1 回程度のスタッフ・ミーティングを実施するなど、運営方法の改善を行った。このミーティングでは、チューター自身が、チュートリアルや運営の課題点や改善方法について相互に共有し、学生の実態についてフィードバックを行うことができる場となっている（太田・佐渡島 2012:248）。

2020 年度春セメスターは、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、平井嘉一郎記念図書館を会場とした運営が不可能となったが、オンライン会議システムを活用した面談形式を中心としながら、時差のある地域に居住したりインターネット環境が十分でない学生には電子メールを活用してサポートを実施した。

#### **What we do**

利用者が何を論文で論じようとしているか整理していきます。

利用者がどのようにしてその論文を修正していくかの道筋を見つけるのを助けます。

利用者が論文を書きなおしていくための案を見つけるためのアドバイスやヒントを提供します。

剽窃に関する事柄を説明し、利用者がそのルールを理解できるよう助力します。

利用者のアカデミックライティングに関する質問に答えます。

#### **What we do NOT do**

全ての文法上のミスを修正すること（ブルーフリーディングではありません）

論文をかきなおすこと

参考文献やその他の資料を翻訳すること

どのようにしたらいい成績がとれるかをアドバイスすること。（チューターには利用者の成績に関する責任はありません）

チュートリアルセッション以外で個人的にチュートリアルを行うこと。

45 分間をこえてチュートリアルを行うこと。

\* 在学生向け案内ウェブサイトで英文で説明している内容から訳出。ここでは Paper を論文と訳出した

図 7 学生に案内されている、What we do, What we do NOT do

## **5 今後の課題と展望**

最後に、ライティング・チュートリアル・プログラムの運営を通じた課題と、今後の展望について触れる。

### **5.1 プログラム成果の検証**

国際関係学部のライティング・チュートリアル・プログラムは、発足から 4 年間の間、プログラムの運営に力が注がれてきたが、会議等における実施報告を見ても、内容は利用実態（予約や利用の数）や、利用者やチューターの満足度などにとどまっており、その結果や成果の検証（アセスメント）やりサーチが十分に行われてきたとはいえず、本報告も、設置の経緯や実施概要の報告にとどまっている。プログラムを通じた学生の学習成果やチューターの成長を把握し、さらなる取り組みにつなげていくためには、チューターや利用者、専門的な知見を有する研究者の協力を得て、検証や研究を行うことがさらに重要になると考えられる。

### **5.2 継続や展開に関わる予算や体制の課題**

上述のとおり、ライティング・チュートリアル・プログラムは、英語部会の教員と、Introductory Seminar 世話人、部分的に業務を担当する職員の協働によって、時限的な特別予算

を活用して運営されている。これらの教職員にとって、ライティング・チュートリアル・プログラムの運営は主たる担当業務ではなく、教員についても特段の手当て（担当授業数の配慮など）があるわけではないことから、運営にかかる時間的な制約もある。また、学外研究やその他の校務との兼ね合いで担当者が変更となった場合、ノウハウ等が継承されない可能性もある。運営に参加する教員からは、個別のチュートリアルに加えて、すでに紹介したようなライティンググループの形成など、様々な展開への提案もあるが、とりわけ運営支援体制の問題などから、実現していない。

ライティング・チュートリアル・プログラムを、安定して継続し、さらなる展開が可能となる学習支援の取り組みとするためには、それらを支える運営の体制の構築が課題である。

### 5.3 大学全体のビジョンや計画との関係

表1で紹介したとおり、現在、日本の各大学では、それぞれの理念や教育目的と関連しながら、多様なライティング・センターやデスク、チュートリアルなどの取り組みが展開されている。それらは、吉田ほか（2010）が紹介した段階よりもさらに幅広く、各大学においても全学的な取り組みとして位置づけられはじめてるように考えられる。

早稲田大学では、当初は国際教養学部の中に設置されたライティング・センターが、大学全体の方針と合致しながら、留学センターなどの所属を経て、全学機関であるグローバルエデュケーションセンターの一部門として展開してきた経緯がある（早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム）。上智大学も吉田ほか（2010:102）では、国際教養学部を対象にプログラムが紹介されていたが、現在は全学的なものも実施されている（上智大学言語研究センター）。青山学院大学では、AOYAMA VISION の実現に向けて、ライティングセンターの設置や運営が行われていることが紹介され、関西学院大学では「[Kwansei Grand Challenge 2039]の長期戦略テーマ「学修支援の充実」の政策の一つとして」ライティングセンターを設立し、2021年から図書館での対面指導（チュートリアル）が開始される（小林・中竹 2020:7、関西学院大学）。

立命館大学には、国際関係学部を含めて、様々なライティング・サポートへの取り組みが存在するが、一定の規模で、全学的な観点で運営されているライティング・センターは設置されていない。立命館学園は、学園ビジョン R2030 の政策目標において「国際標準の学びの質保証」をはかりながら「さらに進んだグローバル教育・研究の深化」をはかることとし、その「人間像」として「社会の変化に対応し、自ら考え、行動する人間」を掲げている（立命館 c）。本プログラムが目指してきた、国際的な標準での学習支援を通じて「自立的な書き手」を育て、ピア・ラーニングコミュニティを形成する取り組みは、これらの政策目標にも合致したものだと言える。

教育のグローバル化や質保証をミッションに掲げている各大学が、自校のビジョンに合った形でライティング・センターの設置を進めている中、立命館大学においても、大学全体の大きなビジョンや計画の中に、ライティング教育や学習支援をどのように位置づけ、継続的な運営を行っていくのか検討が必要である。立命館大学は、幅広い学問領域を日本語または英語で教授する学部、研究科を擁し、附属校を含めた国内外の多様な中等教育と接続して学生を受入れている総合大学であると言える。上述した立命館大学の教学実践フォーラムにおける、学士課程教育のみに絞った議論においても、日本語、英語という語種や、初年次教育、学問分野の違いに加えて、高



大接続<sup>19)</sup>の観点からも、取り組みの必要性が指摘されている。これらの多様な課題を包摂しつつ、冒頭にあげた「ライティングを過程において指導する」、(学問的な)「領域を横断して指導する」、「紙を直す」のではなく「書き手を育てる」といった基本的な理念を共有しながら、各学部や、図書館、教学部門の垣根をこえた協働や検討が進むことを期待したい(立命館大学高等教育推進機構 2019、佐渡島 2013:4-9)。

謝辞 本稿の執筆にあたり、注7)にも紹介した通り、許しをえて、国際関係学部教授会やFDフォーラムにおいて報告された資料を活用した。また、ライティング・チュートリアル・プログラムの設置や運営に際しては、本稿の執筆者のみでなく、国際関係学部の教職員が参画し、立命館大学教学部、図書館などの部門の多くの教職員からの支援を受けた。御礼を申し上げる。

## 注

- 1) たとえば、運営者向けのリソースとしては、Murphy・Stay (2006)、歴史など網羅的な文献としては、Barnett・Blumner (2008)、ピア・チュートリングについては Gillespie・Lerner (2007)、協会やジャーナルの発行としては、International Writing Center Association など。
- 2) 早稲田大学、青山学院大学、津田塾大学などのライティング・センターのウェブサイトにはこれらの理念や考えかたが明記されている。ただし、国際基督教大学のように、別途ブルーフリーディング(いわゆる文章校正)も行っているケースもある(青山学院大学アカデミックライティングセンター、国際基督教大学 Center for Teaching and Learning、津田塾大学ライティングセンター、早稲田大学 アカデミック・ライティング・プログラム)
- 3) 早稲田大学アカデミック・ライティング教育部門は、ライティング・センターとともに、初年次学生を対象とした「学術的文章の作成」授業を全学的に展開しており、その指導員として、60名から70名の大学院生が活動している。(早稲田大学 アカデミック・ライティング・プログラム)
- 4) 赤井(2011:76)は、図書館によるライティング・サポートが盛んになっている現状について、日本が「ラーニング・コモンズを受容する過程において、米国の大学図書館におけるライティング・センターの設置事例が紹介された」ことも影響したのではないかと言及している。畠山(2011)は、2010年の国際基督教大学図書館のラーニング・コモンズにおけるライティング・サポートデスクのスタートの経緯をまとめているが、1995年には米国の図書館で普及し始めたライティング・センターの重要性が認識され、その設置が要望されていたことが示されている。加えて、上田ほか(2017)は、2013年に文部科学省科学技術・学術審議会学術情報委員会の「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ)」の中で、「学生の主体的学習の効果を高めるために、学生を支援する体制構築の必要性が述べられており、大学による学生への学習支援、とくにピアチュートリングなどによる支援が求められている」ことを紹介している。また、上原ほか(2011:259)では、大阪大学図書館において展開されたライティング・サポートについて触れながら、ラーニング・コモンズが「教育においては「ティーチング」から「ラーニング」へのパラダイムシフトを示す一つの応え」であると紹介し、図書館における学習支援について言及している。
- 5) 日本におけるライティング・センターの展開や、運営については、吉田ほか(2010)などが横断的にまとめているほか、個別の事例について、早稲田大学(太田・佐渡島 2012、佐渡島・太田編 2013)、国際基督教大学(畠山 2011)、津田塾大学(飯野ほか 2015)、青山学院大学(小林・中竹 2020)、広島大学(上田ほか 2017)、追手門学院大学(梅村 2018)、関西大学(岩崎 2018)、関西大学と津田塾大学(関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター 2019)などで報告され、設置の経緯、

チューターの育成や成長から、利用するツール、利用実態まで、様々な観点から分析が行われている。また、連携型組織である Writing Centers Association in Japan ウェブサイトにも、全国 16 大学が紹介されている (Writing Centers Association in Japan)。

- 6) BBP の活動や設置の経緯等については、Ritsumeikan Beyond Borders Plaza ウェブサイトのほか、カンダボダほか (2020) を参照。

- 7) 取り組みの報告については、国際関係学部教授会や教育実践フォーラムに報告されたライティング・チュートリアル・プログラムの報告文書や国際関係学部生向けのウェブサイトを確認した。用いた資料は以下のとおりである。また、本報告の著者は、すべて、ライティング・チュートリアル・プログラムの運営や研修を担当している。

「2018 年度改革に向けた英語チュートリアルプログラムの試行について (2016 年度の報告と 2017 年度の方針)」(立命館大学国際関係学部教授会、2017 年 3 月 12 日)

「ライティングチュートリアルプログラム 2017 年度前期報告及び後期の実施について (2017 年 9 月 27 日)

「2017 年度後期ライティングチュートリアルの運営について (報告)」国際関係学部教授会、2018 年 2 月 20 日)

「2018 年度春学期 英語ライティングチュートリアルの運営について (報告)」立命館大学国際関係学部教授会、2018 年 10 月 2 日)

「2018 年度ライティングチュートリアル総括について」(立命館大学国際関係学部教授会、2019 年 2 月 19 日)

「2019 年度ライティングチュートリアルプログラムの運営について (報告)」(立命館大学国際関係学部教授会、2020 年 2 月 18 日)

「ライティング・チュートリアルの運営について」(2019 年度第 1 回教学実践フォーラム「論理的思考力・探究力」を育てるアカデミック・ライティング—言語の枠を超えた「書く」指導のあり方—: 2019 年 8 月 5 日)

Manaba+R 国際関係学部生のページ「Writing Tutorial」(2020.8.16)

- 8) GS 専攻はグローバル 30 の一環で各大学で設置された英語で学ぶ学士課程の学位プログラムの一つである。国際関係学部の成り立ちや取り組みについては、君島 (2018) に詳しい。

- 9) 2018 年度カリキュラムから Academic English は廃止され、Academic Skills において専門的な学習、研究につながるスタディスキルが教授されている。

- 10) 立命館大学国際関係学部ウェブサイトを確認 (立命館大学国際関係学部 a)。

- 11) ジョイント・ディグリー・プログラム (アメリカン大学・立命館大学国際連携学科) の設置の経緯や議論については中戸ほか (2019) を、アメリカン大学のライティング・センターについては American University を参照。

- 12) Turnitin を活用した 2016 年度の取り組みについては、成果も含めて Kunschak (2018) にまとめられている。

- 13) 2018 年度からは学期はじめなどの時期をのぞいて、月曜日から金曜日の間、毎日開設された。また、オンラインで実施された 2020 年度春セメスターからは昼休み (12:10-12:55) にも追加された。

- 14) 平井嘉一郎記念図書館は、2016 年度 4 月に衣笠キャンパスに開設され「学びのコミュニティ」の拠点となるよう、“立命館大学の学習者・研究者の新しいニーズに応える豊かな機能を備えるように設計され”、ラーニング・コモンズやカフェなども併設されている (立命館大学平井嘉一郎図書館)。

- 15) ライブラリースタッフは、立命館大学図書館の学生スタッフで、各ライブラリーで配架やツアー、各種プロジェクトなどを担当している (立命館大学図書館)。

- 16) 本取り組みは、立命館大学図書館のスタッフが予算面だけでなく、会場の確保や、利用施設の供与な

どについて尽力したことによって実現した。

- 17) ティーチングアシスタントやエデュケーションサポーターについては、全学部門が担当することで、研修や、誓約書等が丁寧に整備されていた。反面、日本語を理解しない院生、学部生に対するサポートは限定的だったため、ライティング・チュートリアルに特化した部分も含めて、独自に研修の設計を行った。
- 18) 2019 年 2 月に、ライティング・チュートリアル・プログラムを担当する職員が日本語チュートリアルを担当する教員とともに、金沢大学において実施された FD セミナー「大学におけるライティング支援」に参加し、佐渡島紗織早稲田大学教授から同大学のライティング・センターの事例について学び、学部内の会議等で成果を共有した（金沢大学国際教育員高等教育開発・支援系／部門）。
- 19) ライティング支援やセンターの取り組みは、大学のみにとどまるものではない。国際基督教大学高等学校では、その嚆矢としてライティングセンターを設置している（国際基督教大学高等学校）。

## 参考文献

- 赤井規見「大学図書館とライティング教育支援」『カレントアウェアネス』、310 号、2011 年（<https://current.ndl.go.jp/cal1756>, 2020.8.12）
- American University “Writing Center”.（<https://www.american.edu/provost/academic-access/writing-center.cfm>, 2020.8.22）
- 青山学院大学アカデミックライティングセンター「アカデミックライティングセンターとは」（<https://www.agulin.aoyama.ac.jp/writingcenter/greeting/>, 2020.8.30）
- Barnett R. W., Blumner, J.S. eds. *The Longman Guide to Writing Center Theory and Practice*, Pearson Education, 2008.
- ボイド J パトリック「アメリカでの発足—ライティング・センター誕生の経緯—」佐渡島紗織、太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み—』ひつじ書房、2013 年、242-248 頁。
- Gillespie P, Lerner N, *Longman Guide to Peer Tutoring*, 2<sup>nd</sup> edition, Pearson Longman, 2008.
- 畠山珠美「ライティング・センター：構想から実現へ」『The Journal of Information Science and Technology Association 61（12）』2011 年、483-488 頁。
- 広島大学「ライティングセンター」（<https://www.hiroshima-u.ac.jp/wrc>, 2020.8.21）
- 飯野朋美・稲葉利江子・大原悦子「個別相談とライティング支援の可能性—津田塾大学ライティングセンターの活動分析から」『津田塾大学紀要』No.47、2015 年、133-148 頁。
- International Writing Center Association（<https://writingcenters.org>, 2020.8.16）
- 岩崎千晶「高等教育における ICT を活用したライティング支援の方法—次世代を担うライティングセンターの学習環境を考える—」『関西大学高等教育研究』9、2018 年、27-36 頁。
- 上智大学言語研究センター「ライティングチューター制度」（<http://www.sophia-cler.jp/lc/tutorial.html>, 2020.8.14）
- 壁谷一広「包括的な学習支援アプローチ期—1990 年代中期—現在」谷川裕稔編『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き—日本の大学にどう活かすか』ナカニシヤ出版、2017 年、109-124 頁。
- 金沢大学国際基幹教育院高等教育開発・支援系／部門「2019 年 2 月 27 日（水）開催「大学におけるライティング支援」」（[https://herd.w3.kanazawa-u.ac.jp/post\\_research/society/20516/](https://herd.w3.kanazawa-u.ac.jp/post_research/society/20516/), 2020.08.11）
- 関西大学・津田塾大学「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」（<https://twc.tsuda.ac.jp/renkeigp/>, 2020.8.12）
- 関西大学ライティングラボ「ライティングラボとは」（<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/about/index.html>, 2020.08.12）

- 関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター編『大学におけるライティング支援—どのように「書く力」を伸ばすか』東信堂、2019年。
- カンダボダ PB・石川涼子・筆内美砂・村山かなえ・羽谷沙織「大学内における学生の正課外活動への支援体制と課題—BBPでの実践を題材に—」『立命館高等教育研究』20、2020年、115-135頁、2020年。
- 荻谷剛彦『イギリスの大学・ニッポンの大学：カレッジ、チュートリアル、エリート教育』中公新書ラクレ、2012年。
- 荻谷剛彦・石澤麻子『教養学部技術一問いをいかに編集するのか』ちくま新書、2019年。
- 君島東彦「国際関係学部の過去・現在・未来：立命館大学におけるグローバル化＝越境の最前線」『立命館高等教育研究』18、2018年、31-42頁。
- 小林至道・中竹真依子「ライティングセンター運営上の工夫とその成果：AWC立ち上げから2年間のデータの比較検討を通して」『青山インフォメーション・サイエンス』47（1）、2020年、6-15頁。
- 国際基督教大学「Global ICU | スーパーグローバル大学創成支援 | 統合的な学修支援体制の構築」(<https://www.icu.ac.jp/globalicu/action-plan/sgu/establishing-an-integrated-learning-support.html>, 2020.8.21)
- 国際基督教大学 Center for Teaching and Learning「ライティングサポート」([https://office.icu.ac.jp/ctl/writing\\_support/](https://office.icu.ac.jp/ctl/writing_support/), 2020.8.12)
- 国際基督教大学高等学校「ライティングセンター」([https://www.icu-h.ed.jp/about\\_us/writingcenter2.html](https://www.icu-h.ed.jp/about_us/writingcenter2.html), 2020.10.17)
- Kunschak, C. "Multiple uses of anti-plagiarism software", *The Asian Journal of Applied Linguistics*, Vol. 5 No. 1, 2018, pp.60-69.
- 関西学院大学「ライティングセンター」(<https://www.kwansei.ac.jp/wc/about>, 2020.8.14)
- Murphy, C., Stay, B.L. ed. *The Writing Center Director's Resource Book*, Lawrence Erlbaum Associates, 2006.
- 中島梓・鹿島萌子「立命館大学におけるライティング・サポート・デスクの理念と実践—チューターの立場から振り返って—」『立命館高等教育研究』16、2016年、101-116頁。
- 中戸祐夫・君島東彦・片岡龍之・新野豊「アメリカン大学・立命館大学国際連携学科の開設：学士課程におけるジョイント・ディグリー・プログラムの設置と課題」『立命館高等教育研究』19、2019年、245-264頁。
- North, S.M. "The Idea of a Writing Center" *College English*, 46（5）1984, pp. 433-446
- 沖裕貴「立命館大学のピア・サポート・プログラム—その特徴と課題、今後の展望—」『立命館高等教育研究』16、2016年、1-17頁。
- 太田裕子・佐渡島紗織「『自立した書き手』を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識—早稲田大学における実践事例とPAC分析—」『Waseda Global Forum』9、2012年、237-277頁。
- 追手門学院大学「ライティングセンター」(<https://www.otemon.ac.jp/facilities/education/writingcenter.html>, 2020.8.14)
- 立命館 a「学園ビジョン R2020」([http://www.ritsumeikan.ac.jp/mng/gl/so-ki/vision\\_r2020/pdf/r2020-final.pdf](http://www.ritsumeikan.ac.jp/mng/gl/so-ki/vision_r2020/pdf/r2020-final.pdf), 2020.8.26)
- 立命館 b「学生・生徒・児童数（2020年5月1日現在）〈立命館大学〉国・地域別留学生数 正規留学生」(<http://www.ritsumeikan-trust.jp/file.jsp?id=339303&f=.pdf>, 2020.8.22)
- 立命館 c「学園ビジョン R2030」(<http://www.ritsumeikan.ac.jp/features/r2030/r2030.pdf>, 2020.8.26)
- 立命館 アジア太平洋大学「ライティングセンター」(<http://www.apu.ac.jp/academic/page/content0075.html/?c=17>, 2020.8.14)
- Ritsumeikan Beyond Borders Plaza「コミュニケーションルーム・サポートデスク」(<http://www.ritsumeikan.ac.jp/bbp/reservation/>, 2020.8.11)

- 立命館大学「TA 制度とは？」([http://www.ritsumei.ac.jp/ru\\_gr/g-ta/ta/](http://www.ritsumei.ac.jp/ru_gr/g-ta/ta/), 2020.08.12)
- 立命館大学大学院キャリアパス推進室 ([http://www.ritsumei.ac.jp/ru\\_gr/g-career/program/list/article.html?id=169](http://www.ritsumei.ac.jp/ru_gr/g-career/program/list/article.html?id=169), 2020.8.25)
- 立命館大学国際関係学部 a「カリキュラム」(<http://www.ritsumei.ac.jp/ir/education/curriculum.html/>, 2020.8.16)
- 立命館大学国際関係学部 b「IR Navi テクニック編」(<http://www.ritsumei.ac.jp/ir/ir-navi/technic/>, 2020.8.11)
- 立命館大学国際関係学部英語部会「Guidelines on Writing Essays and avoiding Plagiarism」、2020 年 ([http://www.ritsumei.ac.jp/ir/ir-navi/common/pdf/technic/technic\\_text\\_12\\_2020.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/ir/ir-navi/common/pdf/technic/technic_text_12_2020.pdf), 2020.8.12)
- 立命館大学教育開発推進機構『ITL News Letter』No.43、2019 年 (<http://www.ritsumei.ac.jp/itl/assets/file/publication/nl/vol43.pdf>, 2020.8.12)
- 立命館大学 平井嘉一郎記念図書館「ABOUT—平井嘉一郎記念図書館の建設と開館について—」(<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/lib/hml/about/>, 2020.8.12)
- 立命館大学図書館「衣笠 Library Staff」(<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/lib/sogo/kicls/top.html>, 2020.8.15)
- Ritsumeikan University College of International Relations, “Academic Writing Tutorial”. (<http://www.ritsumei.ac.jp/ir/eng/academics/writing.html/>, 2020.08.12)
- 佐渡島紗織「チュータリングの理念」佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み—』ひつじ書房、2013 年、2-10 頁。
- 佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み—』ひつじ書房、2013 年。
- 竹腰千絵『チュートリアル伝の伝播と変容—イギリスの大学からオーストラリアの大学へ』東信堂、2017 年。
- 津田塾大学ライティングセンター「個別相談とは」(<https://twc.tsuda.ac.jp/guidance/index.html>, 2020.8.13)
- Turnitin (<https://www.turnitin.com>, 2020.8.16)
- 上田大輔・尾崎文代・高橋努「大学図書館の機能を拡張し発展させる広島大学ライティングセンターの取り組み」『大学図書館研究』105 号、2017 年、75-85 頁。
- 上原恵美・赤井規見・堀一成「ラーニング・コモンズ：そこで何をするのか、何がやれるのか」『図書館界』63-3、2011 年、254-259 頁。
- 梅村修「考え、表現し、発信する学生を育てる追手門学院大学ライティングセンター 現況と課題」『基盤教育論集』第 5 巻、2018 年、19-45 頁。
- 早稲田大学 アカデミック・ライティング・プログラム「概要・沿革」(<https://www.waseda.jp/inst/aw/program/overview>, 2020.8.21)
- Writing Centers Association in Japan, “Writing center resources”. (<https://sites.google.com/site/wcajapan/writing-center-resources>, 2021.1.21)
- 吉田弘子・Johnston Scott・Cornwell Steve「大学ライティングセンターに関する考察—その役割と目的—」『大阪経大論集』第 61 巻 3 号、2010 年、99-109 頁。



## Academic Writing Tutorial

-The case of College of International Relations Ritsumeikan University-

FRENCH Thomas W. (Associate Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

KUNSCHAK Claudia (Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

O'MOCHAIN Robert (Associate Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

RAJKAI Zsombor Tibor (Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

NIINO Yutaka (Assistant Administrative Manager, Administrative Office, College of International Relations, Ritsumeikan University)

### Abstract

The College of International Relations, Ritsumeikan University started the Academic Writing Tutorial Program in 2016 and the program provides support for students to become autonomous, self-reliant writers. In this holistic learning process, they improve their academic writing skills during tutorial sessions in the university library. In this article, which reviews ideas about the expansion of writing centers in the United States and Japan, we describe the development, history, and overview of the English-medium tutorial program, reviewing its achievements and the key issues that were raised through our experiences as developers and operators of the program. The paper elaborates on the future challenges and potentialities of the writing support program in Ritsumeikan University.

### Keywords

Writing Tutorial, Writing Center, Learning Support, Peer Learning, Self-reliant Writers, Autonomous Writers, Faculty-Staff Cooperation

